

江戸の文人大田南畝に学ぶ新しい働き方と ソーシャルキャピタル New Way of Working and Social Capital in Edo Period

加 納 正 二
Masaji KANO¹

要 約

江戸は決して過去ではない。むしろ近未来とみなして、参考にすべき点も多い。江戸の大物文人の大田南畝の新しい働き方やソーシャルキャピタル形成について考察し、現代資本主義の歪みの処方箋の一助にする。

1. はじめに

岸田新内閣が誕生し、「新しい資本主義」という言葉が頻繁に使用されるようになった。しかし、資本主義の問題点が急浮上したというわけではない。資本主義の限界は長く指摘されてきた。

今日の現代資本主義がかかえる大きな問題点は、呼称は様々だが、所得格差（所得の不平等、貧困問題）と気候変動問題（環境問題、温暖化問題、CO2 削減問題）の二つであろう。

この二つの問題点と処方箋（対策）について述べた書物はいくつもある。

処方箋の一つとして、筆者はソーシャルキャピタルとイノベーションに着目したい。ソーシャルキャピタルとは目にみえない資本で、「絆」「信頼」「利他」「互恵」「勤勉」などのことをさす。これらは可視化も数値化も困難であり、エコノメトリックスで分析するにも因果関係を明確にするには困難が伴うが、現代資本主義の歪みを是正する重要なキーワードになると筆者は考えている。

安倍内閣が提唱した「働き方改革」もひいては資本主義の問題点を是正する手法といってよい。「新しい」ものは、常に無からつくり出されるというわけでもない。過去に新しいものが、すでにあることもある。

¹ 岐阜聖徳学園大学 経済情報学部 教授

江戸は時間軸では過去だが、筆者は日本の近未来だと考えている。江戸を見ることはノスタルジーではない。江戸は近未来の参考書だ。災害や疫病が江戸の人々を苦しめ、小さな政府と大きな政府の間を揺れ動く姿は現代に示唆する点がいくつもある。

「憂き世」を「浮き世」に変えようとした江戸人の知恵から学ぶべき点は多い。その一人が江戸時代の大物文人の大田南畝だ。南畝は狂歌師としてその名が高いが、本業は武士であり、多面的な活躍をした武家文人だ。

「働き方改革」で副業、複業などと今日、言っているが、すでに江戸時代にパラレルワークは行われていたのだ。大田南畝はパラレルワークの先駆者といってよい。その根底にある考え方は、インディペンデントワーカーという誰もが主役になり自分らしく生きる生き方をすることだ。

南畝は天明狂歌の爆発的な人気の立役者である。天明時代の狂歌会は、経済学的にも様々な意味をもった。四民（士農工商）、老若男女無関係に参加できた天明狂歌会はソーシャルキャピタルを育んだといえよう。それまで詠み捨てであった狂歌を書物にして出版し、さらに挿絵を入れて狂歌絵本として版行したのは、単なるお遊び、娯楽を経済活動に高めた文化イノベーションであり、文芸界と絵画の世界を結びつけたのは、まさにビジネスエコシステムといえる。

2. 現代の資本主義の歪み

岸田新総裁が就任し、新しい資本主義に関心が集まっている。資本主義の問題点と処方箋を示した書物を紹介しよう。タイトルどおり、ストレートに近代経済学を再検討しているのが、宇沢弘文『近代経済学の再検討』である。

スティグリッツの『世界の99%を貧困にする経済』のpp.15-16では、「不平等は政治制度の失敗の原因でもあり結果でもある。不平等は経済制度の安定性をそこね、不安定制は平等性をそこね、この悪循環がわたしたちの生活を地盤沈下させていく」と述べ、歪みのない世界への指針として、p.387で経済改革の7つの基本方針を提示し、経済効率性と平等性の向上を目指している。

マルクス主義からアプローチしたものに、斎藤幸平『人新世の資本論』がある。人新世という新しい時代をさすキーワードを示して、マルクスの「資本論」を再考し、環境経済を考えている。

ノーベル平和賞を受賞したグラミン銀行創設者のムハマド・ユヌスは、ソーシャルビジネス、起業家の精神、金融システムの再設計の3つを追求すれば、貧困ゼロ、失業ゼロ、二酸化炭素排出量ゼロという「3つのゼロの世界」を実現できるとしている。

社会主義的思想からアプローチしたものに、ピケティ『不平等と再分配の経済学』、ピケティ『21世紀の資本』がある。

ピケティのいう資本主義の根本的な矛盾は $r > g$ の不等式で示される。

R：資本収益率（すべての資産の収益率）

利潤、配当、利子、賃料などの資本からの収入を、その資本の総価値で除したもの。

G：国民所得の増加率

経済の成長率で、所得や産出の年間の増加率を示す。

$r > g$ とは、資本収益率 > 成長率を意味する。

すなわち、資産を持っている富裕層は収入が年率 r で伸びてゆく。財産を親から引き継いだ子孫も同じだ。しかし、資産を持たない庶民は労働力しか持たないため、 r よりも低い年率 g で伸びてゆく。このため、資本主義では永久に格差が広がってゆくとするのが、ピケティの考え方だ。

この格差是正に対するピケティの提案は、グローバルな累進資本課税と、世界の政府による金融情報の共有である。これは富裕層が高額資産を海外のタックスヘイブンに移して課税逃れを行うのを防ぐためである。しかし、このためには国際協調が必要であり、現実的には難しい。

金利により格差が広がるという考え方にもとづき、キリスト教やイスラム教では金利が禁止された歴史がある。古代の哲学者アリストテレスも金利に対して否定的な考え方をもっていた。

この考え方をさらに進めるとマルクスや社会主義の考え方になる。金利や資本家の搾取をなくすために、私的所有権そのものをなくそうとした。すると価格メカニズムは機能しなくなる。自由資本主義は命令なく多くの人々を協調して動かすことのできるシステムであり、それには価格メカニズムが必要だ。

アマルティア・センは倫理的な観点を導入し現代経済学の難問を解こうとした。それは著書のタイトル『経済学の再生—道徳哲学への回帰』が示すとおりだ。

そもそも、アダム・スミスは『国富論』の利己心、競争、市場メカニズムばかりが有名だが、車の両輪としてスミスの著書『道徳感情論』における利他心や博愛の精神を俎上にあげるべきなのだ。

経済倫理を作り出す背景には宗教の存在が考えられる。資本主義の問題点と解決策を仏教からアプローチしたものに、クレア・ブラウン『仏教経済学』がある。ブラウンの第3章のタイトル「人と人の相互依存」p.25、原文では、Interdependent with one another、第4章のタイトル「人と環境の相互依存」p.49、原文では、Interdependence with our environment であるが、ここで使われている「相互依存」は、訳書の中では「縁起」という語は用いられていないが、仏教用語では「縁起」ではないかと推測される。

仏教の視点から資本主義経済の問題点と解決策を考えたものは、日本では井上信一(1994)『地球を救う経済学』がある。

井上(1994) p.21 では、人生の諸価値を6つ想定している。すなわち、善(道徳)、美(芸

術)、真(科学)、聖(宗教)、力(政治)、利(経済)である。これら6つの価値が頂点となった正八面体を井上は描く。さらに井上は、その正八面体の中核には全体を統一する何ものが必要であるとして、p.25で次のように述べている。

「正八面体の6つの価値をそれぞれ満たしながら、強弱をコントロールすることによって全体の調和をはかるというのが、西欧的中核(たとえばヒューマニズム)の姿勢だとすると、どの価値にもとられないことが仏教的中核の姿勢である」

さらにp.26では「仏教の立場では、先ほどの正八面体の中核には、この「仏」がくることになる」と述べている。

正八面体の中核に座るのが「仏」なのかどうなのかについての議論はともかく、人生の諸価値とあわせて経済を論じた点は興味深い。

この他、様々な視点から現代の資本主義を批判し、問題点と対策を記した書物はいくつもある。

3. 働くということ

今日、「働き方改革」という言葉が頻繁に使用される。働き方を考察する理由は二つある。一つには、人口減少社会においては、労働生産性を高めるために働き方を改革する必要があるということだ²。労働生産性を高めるとは二つの面がある。一つは個々の人間の生産性を高めることだ。今一つは社会全体で労働をシェアすることだ。

働く意思があり、働く能力があるにもかかわらず、働く機会を得ることのできない人々に就労のための教育と機会を与えることだ。何らかの事情で社会的に排除されたり孤立したりしている人を社会の構成員として受け入れるソーシャルインクルージョンを促進することが重要だ。

第二には、我々が幸福を感じながら、人生の主役になり自分らしく生きてゆくために、働くことができるようになるために働き方を再考する必要がある。経済学の祖、アダム・スミスは『国富論』で「分業」を説いている。分業により効率性が高まるという考え方のもと、我々は大規模な資本を投じて資本主義を発達させてきた。

今日では「会社」で働くことがあたりまえようになってきている。しかし、100年前の1920年には5.5%でしかいなかったのだ(竹内1999)。

多くの人間が集合して働く「会社」にとられない働き方を考えることは、新しいとい

² 『労働経済白書』(平成29年版、平成30年版)は、「少子高齢化による労働制約を抱える日本が持続的な経済成長を実現していくためには、イノベーションを促進させ多様な人材が個々の事情に応じた柔軟な働き方を選択できるように『働き方改革』を推進し一人ひとりの労働生産性を高めていくことが不可欠であるとされる」と述べている。

うよりも実は原点回帰なのである。

経済学が好きな言葉は「競争」「効率性」だ。宗教の教義を講ずるように現代経済学はこれらのドクトリンを推進してきた。この推進のうちに、おいてきぼりになった人々が出てきた。今日、資本主義には多くの歪みがあることが指摘されるようになった。世界は二つの大きな問題を抱えるようになった。一つは所得格差の問題であり、今一つは気候変動問題である。

所得格差は貨幣価格という数値で示すことが可能だ。だが、我々は数値で示すことのできない幸福の価値にも着目する必要がある。「働く」とは何だろうか。「傍（はた）」を「楽（らく）」にさせることだろう。「楽」とは何だろうか。他者の負担を減らすことだろうか。

この他「楽」には「楽しい」という意味もある。経済活動を意識したわけではないのに、「楽しい」ことをしていたら、経済活動に結び付いたという視点も大事であろう。

正規分布とは実に恐ろしい残酷な現実を示す曲線だ。ぴったり定義どおりの正規分布を描くかどうかはともかくとして、人にはこのようなバラツキがあるのは事実だ。正規分布を仮定し、標準偏差を σ としてデータの平均値を m とすると、 $m \pm 1\sigma$ の範囲には68.3%のデータが含まれることが知られている。組織の中で人材の能力は2：6：2の比率で分布していると巷でいわれるが、正規分布の考え方と整合的だ。

天才アインシュタインのような人物が輩出されるということは、その正反対の物理・数学をまったく理解できない、まったく関心をもてない人間が、この世には存在するという証左と考えてよい。

祝福されてスポットライトを浴びるノーベル賞受賞者やオリンピックのメダリストがいるならば、その正反対の能力の人物が、この世には必ず存在するとみてよい。両極端の能力やパーソナリティをもった人間が混在した状態で社会は成り立っている。このことを忘れがちであるのは、両極端ではない中間層が人口的にはもっとも数が多いからだ。多数派の人間は少数の人間のことをおもんばかりなのが難しい。

いくら所得を稼ぐことができるか、どのような仕事につきどのようなポジションにつき、どのように働くかは個人の努力の結果であり、自己責任の問題と片付けられることが従来は多かった。だが、人がもともと様々な個性をもっている以上、誰もが主役になって自分らしい人生を送れるような働き方、生き方ができて幸福になることは、社会全体で考えなければならない課題だ。

4. 江戸が近未来であるということ

新しいアイデアを出すために無から有を捻り出すことは素晴らしいが難しい。新しい「知」は既存の「知」の組み合わせで誕生することが多い。実は、歴史に新しい「知」のヒントがある場合がある。

「働き方改革」とか「新しい働き方」と今日、言われるが「新しい働き方」はすでに江戸時代の働き方の中にある。本稿では江戸の大物文人大田南畝の例でみてみたい。

江戸時代は言うまでもなく時間軸においては、過ぎ去った過去である。しかし、筆者は江戸を過去と考えていない。筆者は江戸を近未来と考えている。我々は近未来の江戸から学ぶことは多い。このことは江戸を懐古するノスタルジーではない。「歴史は繰り返す」という。災害に関しても同様だ。

江戸時代の疫病や災害は科学が発達していない時代であるからして、人間が禍を制御できなかった過去の時代の話であるとして看過することはできない。今日でも、災害、疫病という江戸人と同じ苦しみを我々は味わっている。

幕末近くになり、種痘が何とか普及し始め、天然痘が減少した時代がある。しかし当時、牛から作成した種痘を体に接種する医療行為を人々は非常に恐れた³。実際、犠牲になった人々もいただろう。この状況は今日のコロナ禍とワクチン接種に対する人々の反応と共通する部分があろう。

災害や疫病とともに生きて、「憂き世」を「浮き世」に変え、江戸人が生きてきた知恵を我々はヒントにすることには大いに意味があるだろう。

環境問題においても江戸では、「もったいない」の精神で、すでに3Rが行われていた。3RとはReduce、Reuse、Recycleのことである。Reduceとは無駄なごみの量をできるだけ削減すること、Reuseとは、一度使ったものを捨てずに何度も使用すること、Recycleは使い終わったものをもう一度資源に戻して製品を作りなおし利用することである。

江戸から学ぶことは多い。

筆者は、織田信長が「天下布武」を岐阜城で唱えた1587年から、1857年大政奉還で、江戸時代は終わるまでの300年間は経済学の教科書として学ぶべき点が豊富にあると考えている。

織田信長が「天下布武」を岐阜城で唱えたのは、1587年である。丁度、300年が経過した1857年大政奉還で、江戸時代は終わる。

歴史上、江戸時代は1603年に家康が江戸に幕府を開いてからだ。したがって江戸時代は1603年から1857年までの254年間である。しかし筆者は、信長の「天下布武」宣言から江戸時代が終了するまでの300年を歴史上の一区切りの期間だと考えている。

この300年間は、経済の歴史の全てが含まれているといえる。つまり、歴史は「乱」「静」「動」の3期に大別される。この3つの時期の繰り返しが歴史だ。「乱」とは混沌とした時代だ。体制ができあがっていない時代をさす。戦国時代の動乱が該当する。「乱」の時期が終わり、体制ができる。規制が厳しい「静」の時代だ。大きな政府の時代ともいえる。支配階級である武士は謹厳であることが求められる。

³ 吉村昭の小説『雪の花』が、江戸時代の天然痘撲滅の様子をリアルに語っている。

やがて、安定した社会になると、自由度の高さが求められる。経済活動を行う町人にとっては「動」の時代だ。規制は緩和され、「小さな政府」の時代になる。社会の自由度が高い時代のほうが学問や芸術は活発になる。代表例として田沼意次の時代がある。

自由な社会は管理階級である武士の腐敗と墮落を生み、町人にもその空気は及ぶ。次には引き締め、「大きな政府」により規制が厳しくなる。町人にとっては「静」の時代が起きる。「動」から「静」への体制移行の際は、あるいは、「静」から「動」への移行期には、しばしば「小さな乱」が起きる。たとえば、田沼意次から松平定信の政治に移行する際は、「寛政の改革」という「乱」としては規模が小さい「小さな乱」がおきている。寛政の改革では、肅清により多くの文人が処罰を受けた。

文化・文政時代には大塩平八郎の乱が起き、「天保の改革」へと結びついてゆく。こういった経済の動きは現代にもあてはまる。

第二次世界大戦は、筆者の歴史三区分からすれば、「乱」の時代である。終戦となり、戦後復興の時代となる。戦後の復興経済を支えたものは、3つの民主化（財閥の解体、農地改革、労働民主化）であるが、この他、「傾斜生産方式」により、エネルギーの中心となる石炭と産業の中心にある鉄鋼を集中的に増産したことがある。政府が民間の経済活動に大きく関与した時代で「大きな政府」の時代だ。筆者の歴史三区分からすれば「静」の時代だ。国民は耐え忍びながら復興をめざして働く。

やがて、1956年の経済白書に「もはや戦後ではない」と記述されるように、時代は戦後復興から高度成長時代へと移行する。国民が活発に経済活動を行う「動」の時代である。1961年に世界的な大ヒットとなった坂本九の歌謡曲『上を向いて歩こう』は高度成長時代を象徴する歌だ。

「動」の時代は1973年の石油危機で終焉を迎える。これは体制が変わる節目の「小乱」といえる。石油危機のあとは省エネの体制に変わってゆく。その後は安定成長で、「静」の時代だ。

1985年のプラザ合意を契機に日本経済はバブルの時代に入る。「動」の時代である。1991年バブルが崩壊し、失われた20年、30年と言われる時代だ。光が見えかけるとリーマンショック（2008年）が起き、さらにコロナショックである。

5. 大田南畝という人物

大田南畝は武士でありながら、多くの著作を残した文人だ。大田南畝の武士としての名前は大田直次郎という。武士としては、親と同じ江戸城の警備にあたる御徒（おかち）からスタートした。御徒は将軍にお目見えできない御家人で70俵5人扶持の微録だ。今日の給料にするならば300万円ぐらいの年収ではなかろうか。

寛政の改革で行われた学問吟味に、南畝は46歳のときお目見え以下のコースでは首席

合格して、南畝は支配勘定⁴となる。今日でいえば、財務省のような役所の中間管理職である。

大田南畝は江戸の大物文人で、様々な文芸活動を行った。文芸のジャンルにおいてその筆名が異なる。大田南畝は漢学者としての筆名だ。デビューした狂詩では寝惚け先生、一大ブームを起こした天明狂歌時代には四方赤良（よものあから）、大坂銅座詰め勤務以降は蜀山人（しょくさんじん）と名乗った。狂歌の筆名のことを狂名という。この他にいくつもの筆名で膨大な著述⁵を残している。

天下泰平の江戸中期の武士は、戦を行う武人ではなく、年3回の定額の禄を得て生活する今日でいえば公務員的な仕事である。したがって、江戸城に勤めながら多くの文芸活動を行った大田直次郎は、今日でいうならば霞が関に務める国家公務員として70歳を過ぎるまで勤務しながら、多くの著述を残した文人だ。つまりパラレルワークの先駆者なのである。

筆者が江戸は過去ではなく、近未来だという理由はここにある。

働き方に関して、江戸はワークシェアリングが導入され、副業、複業をもつパラレルワークが行われ、70歳を超える高齢者の活用もすでに実施されていたということだ。安倍内閣で提唱された「働き方改革」は決して新しい働き方というわけではなく、すでに江戸時代の大田南畝は実践していたということだ。

6. 大田南畝のインディペンデントワーカーとしての働き方

筆者は、これからの新しい働き方のキーワードは「インディペンデントワーカー」だと考えている。文字通り解釈すれば、「インディペンデント」とは、「ディペンデントしない」ということで、従属しない、組織に所属しない、という意味になるだろうが、筆者は従来から存在する「個人事業主」という意味で使うのではない。

筆者のいう「インディペンデントワーカー」は、会社員であるとか、個人事業主であるかなど組織に所属するか否かを問わない。組織に所属していてもいなくても「インディペンデントワーカー」なのである。

インディペンデントワーカーとは、人生の主役は自分自身にあると考え、自分らしく生きてゆく働き手のことをさす。評価者は自分自身であり、自分が幸福と感じ、満足できるかどうか重要だ。したがって、職位や肩書などは無関係だ。

お金のためにやむなく上司の顔色をうかがいながらサラリーマン生活を送っていると

⁴ 高柳（1980）p.27によれば、勘定組頭—勘定—支配勘定という序列になっており、支配勘定の禄は100俵高である。

⁵ 岩波書店から『大田南畝全集全20巻』が出版されている。

考えている会社員と、会社を大きくしたいが成長させることができず、やむをえず小さな会社の社長をしているという二人の人物がいたとしよう。

この2人の肩書は「会社員」と「社長」で一見、違う世界に生きているように見えるが、卑屈に考える生き方は、人生の主役として生きていないためだ。この点では「会社員」でも「社長」でも同じだ。一会社員であることや小さな会社の経営者であることを卑屈に感じるならば、幸福とはいえず、人生の主役として自分らしく生きているとは言い難い。

すると、それは「心の持ち方」の問題であって経済学の対象ではない、スピリチュアルな部門は、経済学者のお仕事ではないという反論が出そうだ。しかし、人はロボットのように働くことはできない⁶。

誰もが主役になって自分らしく生きる社会こそが、理想の社会といえよう。その一つの生き方のモデルがインディペンデントワーカーだ。

インディペンデントワーカーはたとえ、組織内で働いて会社から給料をもらっていても、その心は独立しているということだ。会社員は雇用契約で働いているのだが、ひとつひとつの仕事を業務委託され、請負い、働いているというプロ意識をもつことだ。決して会社という組織に従属しているのではなく、自分自身をプロデュースするプロデューサーである自覚をもつことだ。

インディペンデントワーカーは、何をもって成功とするか、自分自身で決めることが大切だ。我々は世間、親、教師からの刷り込みで「成功」とは何かイメージしている場合が多い。会社へ入れば、まるでその肩書きと会社から頂く給料の多寡が人間の値打ちまで決めてしまうような錯覚にとらわれがちだ。「成功」の尺度を自分で決めることのできる人がインディペンデントワーカーである。

たとえ、組織を離れて起業しても、常に大きな会社の CEO ほど偉いのだという価値尺度を持っている人物を筆者はインディペンデントワーカーとは呼ばない。

かつての日本で「サラリーマンは気楽な稼業」と歌われたことがあったが、今はそのような時代ではない。それだけに、たとえ組織の中で働く場合も主体性をもって働いていないと、毎日が流されてゆくことになる。

インディペンデントワーカーの精神は、会社員か個人事業主であるかないかにかかわらず、独立したプロということだ。この精神は頑固に組織の中で自分を主張するという意味ではない。

むしろ大田南畝から学ぶその精神は柔軟さだ。大田南畝は17歳から75歳までの58年

⁶ たとえば、ジャン・ティローは『良き社会のための経済学』第5章の中で、経済学的人間以外にも関心を示し、心理的人間、社会的人間、法的人間、宗教的人間などを紹介している。

またバーナード『経営者の役割』p.297では、「目に見えるものが、目に見えないものによって動かされて」として組織にスピリチュアルな面があることを示唆している。

間を武家文人として生きてきた。南畝の人生は武士として前半と後半に大別できる⁷。前半は17歳から48歳までの御徒、後半は48歳から75歳までの支配勘定である。御徒は番方であり、支配勘定は役方である。

大田南畝は寛政6年(1794)、46歳のとき、学問吟味でお目見え以下のクラスでは主席で合格し、役方への椅子をものにす。田沼時代には、勘定組頭の土山宋次郎(狂名は軽小なごん)らと高級料亭で豪遊した記録を南畝自身が記している。狂歌の世界では、南畝が先生であるが、武士のランクとしては土山のほうが、はるかに上である。

田沼時代から寛政の改革、松平定信の時代へ巧みに、南畝は変身を遂げているように見えるかもしれない。このような姿勢をサラリーマンの処世術と冷やかな目で見ると読者もいるかもしれない。

しかし、我々は、南畝の柔軟性を見習うべきように思う。これは江戸に限らず今日でも同じだ。組織や世の中は、リーダー交代とともに180度、価値観が転換する場合がある。ここで、組織にべったり寄りかかってきた組織人は混乱してしまう。

だが、もともとインディペンデントワーカーとして、人生の主役は自分自身だと考えて自分らしく生きてきた人間は動揺しない。田沼時代には誘われるまま、南畝は高級料亭で豪遊したが、おそらく、その費用は土山らパトロンによるものであろう。

南畝自身は儉約家であったと推測される。南畝が会合に来ているかどうか置かれた履物ですぐわかったという。なぜならば南畝の履物は、ひどくすり減っていたからだ。南畝は膨大な書物を所有していた。決して浪費家ではなかったと思われる。

筆魔ともいべき南畝の特質は、多くの著作を残した。田沼時代の南畝は、今日的に言えば、上司のお供でネオンの街で遊ぶことはあっても帰宅後は文机に向い、多くの文章を記したのであろう。若者からは「勤勉」という言葉は説教くさくて歓迎されないであろうが、田沼時代の南畝は狂歌会や遊行の場でみせる顔とは異なるまじめな顔で、帰宅後は勤勉に書物を読み、書いていたことだろう。

その勤勉さが松平定信の時代の学問吟味で開花したにすぎないのだ。したがって、南畝は世渡り上手なサラリーマンというわけではなく、主体性をもった柔軟な発想のできるインディペンデントワーカーということだ。

インディペンデントワーカーの精神について述べたが、大田南畝から学ぶ具体的な働き方のキーワードはパラレルワークとギグワーク、そして高齢者雇用であろう。大田南畝は武士大田直次郎として70歳を超えても働いている。70歳にして昇給しており、三人扶持を増加されている。古希にしてこの頑張りには素晴らしい。現代の高齢者雇用で70歳の社員は昇給するだろうか。南畝が死去したのは75歳であるが、その直前まで役所で働いていたと推測される。

⁷ 加納(2019)では、大田南畝の人生を4つにわけている。

今後、人生100年時代をみすえた場合、人の職業はライフステージにおいて異なっていて当然である。むしろ、最初からパラレルに仕事を進めたほうがよいだろう。大切なことは職業ではなく、自分というかけがえのないこの世に一人しかいない個性が、いかにして社会のお役に立つかということだ。

働くとは「傍（はた）」を「楽（らく）」にすることであり、短期的にはともかく、長期的には、人様のお役に立つ利他の精神をもっていないと、ビジネスは成り立たない。パラレルワークとは、会社員が休日にお小遣いを稼ぐための内職という意味ではない。

会社という組織で発揮できなかった自己の才能を社会に貢献する機会がパラレルワークである。会社という組織では、それぞれが生きがいを感じ能力が発揮するさまざまな工夫がされている。代表的な仕組みが、労働の成果に応じた報酬と地位を与えることである。しかし、公平性を考えた場合、多くの従業員を抱える企業では、個々の社員の個別事情まで考慮することは難しい。

人は誰でも人生の主役だ。しかし、資本主義が発展し、大規模化し、分業が進むほど、誰もが主役になり自分らしく生きることが難しくなる。フレキシブルに個別の事情に対応した働き方をして生きがいを手にいれるためにパラレルワークがある。

筆者は現代を「二つのジコウ問題」と称している。一つは「人口減少」である。少子高齢化で労働供給制約を抱えることになる社会だ。もう一つは「人工知能」だ。人工知能はもろ刃の剣だ。人工知能は我々を夢のようなすばらしい社会に導いてくれる可能性がある一方で、人工知能に職を奪われる人間も出てくる社会だ。

このような社会だからこそ、誰もが主役になり、自分らしく生きることの意義と必要性がでてくる。人工知能にできない人間らしい仕事を創造することが求められてくる。

幸福を測定するのは難しい。

文豪トルストイの『アンナカレーニナ』（中村白葉訳）の冒頭は次のように始まる。

「幸福な家庭はすべてよく似かよったものだが、不幸な家庭はみなそれぞれに不幸である」

この含蓄のある言葉は経済学に二つの示唆を与える。第一に、幸福には共通性があるということだ。このことは法則性ともいえ、エコノメトリックス（計量経済学）の分析対象となりうるということだ。すなわち被説明変数に（個々人に尋ねるアンケートなどで）幸福度をとり、説明変数に所得、年齢、役職（ダミー変数）、男女（ダミー変数）、学校教育を受けた年数（たとえば中学卒であれば、9年、大学卒であれば13年）などを入力して、因果関係の法則性を分析することが可能になり、それなりの分析結果を得ることができるであろう。

第二に、不幸はそれぞれ独自の不幸をもち、幸福を打ち消す。したがって、エコノメトリックスで得られた幸福の法則性に信憑性が疑われるサンプルも含まれてくる危険性があるということだ。そもそも、現在、非常に不幸だと感じているような人は幸福度調査に応じるような心の余裕はないだろう。そのため、サンプルバイアスが強く入るリスクがある。

幸福は人に語ろうが、語るまいが、幸福度の客観的評価は難しい。それだけに、誰もが主演になり自分らしく生きることの満足度は、自分自身で評価をくだすことになるだろう。

ギグワークのものと意味は、「ちょっとしたジャズ演奏」だ。ちょっとした細切れの仕事をする。インディペンデントワーカーの具体的な仕事としてパラレルワークやギグワークが伴ってくる。

人生の主演は自分自身だ。ところが組織で働くと必ずしも主演としての満足（自己実現の欲求）は満たされるとは限らない。分業は経済学の父アダム・スミスの『国富論』にも述べられる経済学の基本的な考え方だ。効率性の追求である。

資本を投入し、大きな組織を作り分業を行い、我々は資本主義を作ってきた。経済学の教科書には必ず比較優位の理論が紹介されている。例としてよく用いられるのが天才物理学者アインシュタインと秘書（もしくは弟子）が共同で作業を行う場合の分業だ。

今日的に表現するならば、アインシュタインは研究業務を行い、秘書が学会発表の資料作成を行い、出張のための飛行機や宿泊ホテルの手配を行う分業体制のほうが効率的だ。この例は一見、説得的だ。なるほど、そのほうが生産性はあがるだろうと経済学の教科書を読んだ経済学徒たちは素直に思う。

この例の効率性の考え方で、会社で分業を行うと主演になれない人が大勢でてくる。不満をもつ。しかし、大学経済学部で学んだ教科書には、比較優位で分業しなさいと書いてある。大学時代のテストでも、教科書に書いてある比較優位の理論の例をそのまま解答したらAプラスの評価を頂いた、と優等生的な経済学徒は反論するであろう。

ところが、この教科書によく登場する例は二つの点で落とし穴がある。まず、身近にアインシュタインのような天才は滅多にいない。第二に、人は効率性を第一に考えて生きている人ばかりとは限らないということだ。現代資本主義は宗教のように人々を「効率性」という名のお題目で洗脳したといえる。

「私のほうが能力が上だ。だからあなたは私の補佐役だ。それで作業が効率的になる。この生産関数は、この点で微分するとゼロになり2人の協働作業は極大値を示す。ゆえに2人ともハッピーだ」と本気で信ずることができる人は、熱心な現代資本主義という宗教の信者か、自分をアインシュタインのような天才と勘違いしている自惚れ屋か、いずれかであろう。

効率性よりも他の価値観に意義を求める人も大勢いる。人の生き方のミスマッチは悲劇だ。筆者はこのような残念なことが起きるのを避けるために「おでん理論」を提唱している。「おでん理論」とは、アインシュタインのような天才以外の人物に筆者がお勧めする働き方の理論だ。

食材でたとえるならば、鯛は食材の王様だ。ゆえに通常、鯛に主演以外の役はまわってこない。腐っても鯛だ。しかし、大根は必ずしも常に主演の料理というわけではない。そのような大根が鯛と一緒にコラボしようとするれば、たちどころに大根は切り刻まれて、元

の大根という素材の形を失い、鯛の刺身のツマにされてしまうであろう。

むろん、刺身のツマという分業の役割を果たすことにより、「高級料理」というステータスを得ることができるかもしれない。現代資本主義はそのように人々を説いてきた。だが、たった一度の人生の主役は自分自身にあり、自分らしく生きたいと願うならば、大根という食材は、刺身のツマになる人生よりも煮込みおでんの具をめざしたほうがよい。

煮込みおでんという料理は大根という食材をまるまると、そのまんまの形で生かすことができる。しかも煮込みおでんには、特に決まった主役がいるわけではない。鍋の中にある具の食材はすべて主役である。

インディペンデントワーカーとは、このような人生の主役として生きる人々をさす。現在勤務している職場が必ずしも、煮込みおでんの料理の場所とは限らない。そのために必然的に登場してくるのがパラレルワークだ。

大田南畝の場合は、御徒（おかち）という江戸城の警備という職にある下級武士大田直次郎と武家文人大田南畝というパラレルワークを行ったのである。天明狂歌時代の大田南畝は四方赤良（よものあから）という狂名でまさに狂歌界の中心的人物だったのだ。

武士と文人というパラレルワークだけではなく、文芸の中でもパラレルワークを行い、南畝は狂歌・狂詩・随筆・漢詩など幅広いジャンルに応じてペンネームを使い分け活躍している。

また南畝は「ギグエコノミー」といえる細切れの小さな仕事もいっぱい行っている。狂歌師として弟子たちからは指導料（点料）をもらっていた。当時、原稿料（潤筆料）はそれほど多くはなかったかもしれない。滝沢馬琴は彼の『南宋里見八犬伝』が大ヒットするまで、潤筆料という概念はなかったと述べている。

南畝は、今日的にいうキャッチコピーも作っていた。江戸時代には『買物独案内』という買い物のカタログ、商店の広告集がある。南畝はこのカタログ本の序文を書いている。署名は南畝のペンネームの一つの蜀山人を用いている。これは南畝が大坂銅座詰め以降、使用している狂名である。

そもそも四方赤良という天明時代の狂名も、南畝の好きな酒の名前だ。筆名に酒屋の名前をつけて宣伝して広告塔となっているわけだ。「望汰欄（ぼうたら）」という高級料亭を黄表紙『料理献立頭てん天口有（あたまてんてんにくちあり）』の中に登場させるなど巧みに企業広告も支援していた。南畝に対して、望汰欄から、それなりのCM料は支払われていたであろうと推測される。

インディペンデントワーカーについて付け加えておこう。インディペンデントワーカーは組織の中で働くか否かを問わず、柔軟な姿勢で、「おでん理論」で人生の主役として生きてゆく働き方だ。決して、昭和のサラリーマン映画のように、会社に辞表を叩きつけて辞めて、独立して大きな仕事を成功させるのが男だ、などといきがる必要はない。会社に勤めるかどうかは無関係だ。パラレルワークやギグワークなどが具体的な働き方だ。

再度、筆者はインディペンデントワーカーにおける「柔軟性」を強調したい。人生100年時代である。途中で考え方が変わってもいっこうにかまわないのである。効率性第一の企業で所得を高めることだけを考える人生もよし。NPOやボランティアにいそしむのもよい。都会でも過疎の村で暮らすのもよい。働かずに、FIREとして金融資産の運用だけで暮らしてゆくのもよいだろう。

重要なのは、多様な生き方を認める選択肢の多い社会にして、自分らしく生きる生き方の幅がある社会の構築だ。そして忘れてならないのは人生100年時代を前に、車線変更が何回でも可能な社会を構築することだ。年齢・ライフステージとともに人生観・職業観が変化するのは自然な流れである。選択肢を多様にし、かつ、常に車線変更をするように、生き方の路線を自由に変えることのできる社会が求められる。

7. 天明狂歌会から生まれたイノベーション

天明3年(1783)に大田南畝が刊行した『万載狂歌集』で天明狂歌は大ブームを起こした。版元は蔦谷重三郎である。このタイトルは『千載和歌集』のパロディである。

狂歌会は誰でもが参加して狂歌を詠むことができた。もともと、「狂歌というものは、時の興で詠み、集って行い、痴れ者が行う」というのは、狂歌師唐衣橋洲(からころもきっしゅう)の定義だ。

もともと詠み捨てであった狂歌を書物にし、さらに浮世絵とコラボして、狂歌絵本にしたのである。天明5年(1785)には『夷歌百鬼夜狂(えびすうたひゃっきやきょう)』を版行、天明8年(1788)には『画本虫撰(えほんむしえらみ)』を喜多川歌麿の絵で版行している。

詠み捨ての歌が本になり、さらに絵も加わった本として版行される現象は文化イノベーションといってよい。

ジャン・ティロールは『良き社会のための経済学』p.476でイノベーションについて次のように述べている。

「シュンペーターは新たなイノベーションによって、それまでのイノベーションが陳腐化することを『創造的破壊』と表現した。これを実現するためには、競争当局は人為的な参入障壁を取り払わなければならない。その見返りは莫大なものとなろう。いまや付加価値の大半がイノベーションによって生み出されており、この傾向は強まる一方だ。一国の富は、イノベーションによる価値創造をいかに巧みに取り込むかにかかっている」

イノベーションは毎日職場で顔を合わせる同僚のような強い絆よりも弱い絆のほうから誕生しやすい。スタンフォード大学の社会学者マーク・グラノヴェッターの論文、“The Strength of Weak Ties”では、文字どおり「弱いつながりにおける強さ」の考察が行われている。

また、士農工商、様々な身分の人間が集まることは、現代風に言うならば異業種ともい

える。天明狂歌会は異業種で作ったビジネス・エコシステムともいえる。ビジネス・エコシステムに一般的な共通する定義は決まっていないが、筆者は次のように考えている。

ビジネス・エコシステムにも様々な企業が独自のスタイルでシステムを形成しており、統一的で明確な定義はしにくい。

あえて、ビジネス・エコシステムの特徴をあげるならば次のようになろう。まず自然界に存在する生態系（エコシステム）とビジネス・エコシステムが似ている部分として以下の2点をあげよう。

- ①生態系には多くの種がいる。ビジネスでは多くの産業があることだ。
- ②生態系には食物連鎖と共生関係がある。食物連鎖はビジネスでは仕入れ・販売などの縦の関係と考えられる。共生関係は様々な提携など横の関係と考えられる。

この2点をもとにさらに、人間界ならではのビジネス・エコシステムの特徴を考えてみよう。人間は知恵を働かせる生き物である。自然界に見られないビジネス・エコシステムの性質もあるだろう。

- ③同一企業内、同一産業内にとどまらず、産学官を巻きこみ、他産業、さらにライバル企業までも含めたイノベーションが行われる。

競合関係にある個や種とも仲間関係になることは生物界では滅多に見られない光景に思われる。

雌とテリトリーをめぐって競合関係にあるライオンの雄同士が手を組むことはあるのだろうか。2頭以上の雄が共同でリーダーになり、多くの雌をかかえ、巨大ハーレムを形成し、共同支配するような例はあるのだろうか。

あるいはライオンとハイエナが共同して他の動物、たとえば象を獲物として狙うなどということはあるのだろうか。ライオンとハイエナという合同陸軍にさらに空軍のコンドル、海軍のワニも加えた連合軍が司令官の指揮のもとに象などの大型動物を狙うなどという話は寡聞にして知らない。ライバルを含めたチームづくりは人間界独自の行動ではないだろうか。

- ④複合領域にわたり、大きなシナジー効果を狙った戦略が企てられる。効果を計算した戦略的な行動は人間界独自と思われる。

- ⑤ビジネス・エコシステムには、明示契約と暗黙契約の双方が含まれる。資本や業務提携などは明示契約であろう。しかし中心となる企業の製品・サービスの補完財を作る企業との関係は必ずしも明示契約ではなく、暗黙契約も含まれるであろう。

暗黙契約が含まれるのであれば、ビジネス・エコシステムは一枚岩というわけではなく流動的な存在といえる。場合によっては、チーム編成が変化する可能性がある。

- ⑥ビジネス・エコシステムは新たな「価値」を創造する。これが「有効需要」を生み出すことに他ならない。有効需要は雇用を増加させ所得を増やすマクロの経済効果へと結びついてゆく。また「価値」の中にはクリエイティブエコノミーも含まれる。およそ、生物が

芸術活動を行い、そこに価値を見出すとは到底思えない。

上記は筆者が考えるビジネス・エコシステムの条件である。しかし、ビジネス・エコシステムは当初から完成していたわけではなく、そこにはビジネス・エコシステムが形成されてゆく萌芽の段階のメカニズムがあると思われる。

天明狂歌会は、今日のようなビジネスエコシステムとは言い難いがそこに我々はビジネスエコシステムの萌芽をみることができであろう。天明狂歌会は人為的にビジネスエコシステムが形成されたというよりかは、楽しいことをしていた娯楽が自然に経済活動に結び付いていったと考えられる。

「働く」と言葉は「傍（はた）」を「楽（らく）」にすることだ。しかし、「楽」とはアダム・スミスの分業の効率性のみをさすのではなく、「楽（たの）しく」する意味もあるだろう。天明狂歌会はまさに「傍（はた）」を「楽（たの）しく」する娯楽行為から生まれたイノベーションであり、経済活動に結びついていったのである。

また言うまでもなく、天明狂歌会のような参加型の娯楽の会を開催できたのは、心に余裕のある働き方をしていたからだ。

つまり、働き方を変えることはイノベーションにつながるのである。このメカニズムは今日でも起こりうるだろう。コロナ時代ならではの室内娯楽にビジネスチャンスは大いにあるだろう。

ところで、なぜ日本は長時間労働が多いのだろうか。

長時間労働につながる動きとして、江戸時代の二つの流れが考えられる。江戸中期以降、耕地開発が限界に達したが、土地生産性は高まったとされる。これは家族で身を粉にして働き生産性を高めたためであろう⁸。ヨーロッパの農業は大規模化の動きに対して、対称的に日本では小農家の動きにあったのである。

もう一つの流れは商家だ。江戸時代の商家では丁稚が住み込みで働き、読み書きそろばんを学んだ教育機関でもあった。住み込みで働き、教育も受けているから、必然的に拘束時間が長くなるのである。

コロナ禍は様々な点で我々を苦しめているが、テレワークが推進されたことに関しては評価すべきプラス項目である。しかし、テレワークという形態自体は表面的な問題だ。それよりも背景にあるインディペンデントな精神を育むことが重要だ。

インディペンデントな精神はワークライフバランスにも結びついてゆくであろう。

⁸ 速水（2003）は、この動きを「勤勉革命」と称している。

8. 天明狂歌会はソーシャルキャピタル

ソーシャルキャピタルはアメリカの政治学者、ロバート・パットナムによれば、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会の組織の特徴をさす。

物的資本や人的資本などと並ぶ新しい概念である。人的資本は、教育によってもたらされるスキル・資質・知識のストックを表す個人の属性である。ソーシャルキャピタルとは目にみえない資本である「利他」「互惠」「勤勉」などのことをさす。

ソーシャルキャピタルは広い概念である。日本では、宇沢弘文が「社会的共通資本」という概念を用いているが、宇沢（2021）は社会的共通資本を①自然環境、②社会的インフラストラクチャー、③制度資本の3種類をあげている。

宇沢（2021）「はしがき」p. iiから引用する。

「社会的共通資本は、一つの国ないし特定の地域に住む人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような装置を意味する」

宇沢（2021）は社会的共通資本を①自然環境、②社会的インフラストラクチャー、③制度資本の3種類に分け、次のように例示している。

①自然環境

大気、森林、河川、水、土壌など。

②社会的インフラストラクチャー

道路、交通機関、上下水道、電力・ガスなど。

③制度資本

教育、医療、司法、金融制度など。

しかし、ここで筆者が言いたいのは、宇沢のいう社会的共通資本よりも広い概念だ。

ソーシャルキャピタルは、目に見えないだけに定義もしにくいし、また直接的な経済効果も評価しにくい。

社会的な絆には様々なメリットがあるだろう⁹。たとえば孤立死を避けることができる。高齢者の孤独を救えば、ひいては社会保障費削減に結びつくだらう。何らかの事情で社会的に疎外され、就労に結びつかない人にも雇用機会を与えることに結びつくだらう。またイノベーションにも結びつくことが期待される。

では、ソーシャルキャピタルはどのように醸成したらいいのだろうか。倫理・道徳を育

⁹ 宮川・大盛（2005）の pp.92-107 では、ソーシャルキャピタルがどのような経路で家計・企業・政府の経済活動に影響を及ぼし得るかを考察し、18 のケースを示している。

くむには宗教は一つの手段として考えられるかもしれない。しかし、日本における宗教は特殊である。無宗教ともいえる人が多い。にもかかわらず元旦の初詣は神道という宗教とは無関係にさかんであり、仏教の信者か否かにかかわらず、葬儀・法要は仏式で行われることが多い。クリスマスやハロウィンが商業化され、多くのキリスト教徒ではない日本人が楽しんでいる。

このような日本では、ソーシャルキャピタルを育むには、天明狂歌会のような開放的な絆をもつ機会を作ることが一つの手法として考えられる。むろん、狂歌会をそのまま、現代日本で再現しようという提案ではない。ネット社会にふさわしい娯楽がイノベーションに、経済活動に結びつく機会があるであろう。

9. むすびに

いったい大田南畝とは「普通の人」なのだろうか、とふと思う。偉業と普通の仕事は異なるだろう。

真冬にエベレストに登頂することは大変なことだろう。しかし、朝のNHKのテレビ体操を見て、体操をするのはさほど大変なことではない。しかし、毎日、一日も欠かさず、朝の定刻にテレビ体操を行い、それを何十年も続けることは、もはや「普通」のことではない。

普通のことを毎日積み重ねることは普通ではない。南畝の偉大さはそのような徹底した普通さにあるように思う。いわば大田南畝は「偉大な普通の人」といえよう。

では普通ではない人物とは、どんな人物だろうか。大田南畝が活躍した同時代の人物を見るならば、まず平賀源内がいるだろう。源内は天才といえる。源内は文人、洋画も描く画家、エレキテルや石綿など発明家、鉾山発掘などマルチタレントで江戸のレオナルドダビンチといえよう。源内は人を殺め、最期は獄死したとされる天才らしい悲劇的なエピソードを残して泉下の人となった。

また関西には強烈な個性をもった奇人として上田秋成がいた。秋成は人嫌いで有名である。大田南畝は源内のような万能の天才でもなければ、秋成のような奇人でもない。普通のことを普通に行った、普通だが偉大な人物だと思う。

江戸時代の大物文人大田南畝の働き方は大いに現代の我々の参考になるであろう。また天明狂歌会がソーシャルキャピタルとしての機能、ビジネス・エコシステムの萌芽をもっていたことは着目すべきだ。

江戸は過去ではなく、近未来だ。現代資本主義の歪みの処方箋として様々なヒントを見出すことが可能である。

参考文献

- 井上信一（1994）『地球を救う経済学』すずき書房
- 宇沢弘文（2021）『社会的共通資本』岩波新書
- 宇沢弘文（1977）『近代経済学の再検討』岩波新書
- 加納正二（2019）『江戸の働き方と文化イノベーション』三恵社
- 加納正二（2019）『令和の日本経済と企業経営の課題—誰もが主役になり自分らしく生きる時代—』三恵社
- 加納正二（2020）『日本経済の軌跡と明日—高度成長から令和新時代まで—』三恵社
- 加納正二（2021）『江戸の経済社会と商人の生きざま—天下布武から大政奉還までの300年間』敏貞社
- 加納正二（2021）『5代将軍綱吉は犬将軍か大將軍か』敏貞社
- 厚生労働省（2017）『平成29年版労働経済の分析—イノベーションの促進とワーク・ライフ・バランスの実現に向けた課題』（『平成二十九年版労働経済白書』）
- 厚生労働省（2018）『平成三十年版労働経済の分析—働き方の多様化に応じた人材育成の在り方について』（『平成三十年版労働経済白書』）
- 斎藤修（2006）「武士と手代—徳川日本の正社員」『日本労働研究雑誌』No.552, July
- 斎藤幸平（2021）『人新世の資本論』集英社新書
- 高柳金芳（1980）『図説江戸の下級武士』柏書房
- 竹内洋（1999）『日本の近代12 学歴貴族の栄光と挫折』中央公論社
- 内閣府（令和元年）『令和元年版経済財政白書』
- 働き方の未来2035：一人ひとりが輝くために懇談会（2016）報告書
- 速水融（2003）『近世日本の経済社会』麗澤大学出版会
- 浜野潔他（2013）『日本経済史1600—2000』慶應義塾大学出版会
- 浜野潔（2011）『歴史人口学で学ぶ江戸日本』
- 宮川公男・大盛隆編（2005）『ソーシャルキャピタル』東洋経済新報社
- アマルティア・セン著、徳永澄憲他訳（平成14）『経済学の再生』麗澤大学出版会
- クレア・ブラウン著、村瀬哲司訳（2020）『仏教経済学』勁草書房
- ジョセフ・E・スティグリッツ著、楡井浩一・峯村利哉訳（2012）『世界の99%を貧困にする世界』徳間書店
- トマ・ピケティ著、山形浩生他訳（2015）『21世紀の資本』みすず書
- トマ・ピケティ著、尾上修悟訳（2020）『不平等と再分配の経済学』明石書店
- ムハマド・ユヌス著、猪熊弘子訳（2010）『ムハマド・ユヌス自伝』早川書房
- ムハマド・ユヌス著、千葉敏生訳（2010）『ソーシャル・ビジネス革命』早川書房
- ムハマド・ユヌス著、山田文訳（2018）『3つのゼロの世界』早川書房

ユヌス教授のソーシャル・ビジネス制作委員会(2016)『ユヌス教授のソーシャル・ビジネス』
株式会社滋慶出版

Amartya Sen (1988) *On Ethics and Economics*, John Wiley & Sons.

Clair Brown (2017) *Buddhist Economics*, Bloomsbury Press.

Diana Schumacher (2011) *Small is Beautiful in the 21st Century*, Lighting Source UK

E.F.Schumacher (2010) *Small is Beautiful*, Harper Collins Publishers.

Ernest C.H.Ng (2020) *Introduction to Buddhist Economics*, Palgrave Macmillan.

Gabor Kovacs (2020) *The Value Orientations of Buddhist and Christian Entrepreneurs*,
Palgrave Macmillan.

Granovetter, M. (1973) The Strength of Weak Ties, *American Journal of Sociology*, Vol.78.

Inoue Shinichi (1997) *Putting Buddhism to Work*, Kodansya.

Laszlo Zsolnai (2007) “Western Economics Versus Buddhist Economics,” *Society and Economy*,
29 (2007), 2, pp.145-153.

Laszlo Zsolnai (2011) “Buddhist Economics,” *Handbook of Spirituality and Business*, Palgrave
Macmillan.

Muhammad Yunus (2010) *Building Social Business*, PublicAffairs.

Muhammad Yunus (2017) *A World of Three Zeros*, Perseus Books.